

商学会賞受賞報告

第11期インゼミ 久米 敬太郎
石塚 佑人
小平 紘子
佐藤 和也
山田 彩華

◆執筆論文の概要

私たち第11期インゼミプロジェクトチームは、この度、三田祭論文「ワケあり商品の購買意図」において、慶應義塾大学商学会賞を受賞いたしました。受賞論文の概要は、以下にご説明するとおりです。

近年、消費者の間でワケあり商品の注目が高まっています。ワケあり商品とは、正規品としての規格を満たしていない商品のことで、しばしばそのワケを明示したうえで値引きして販売されている商品のことであります。値引きは「価格知覚」を低めるため、シグナリング効果によって、「知覚品質」も低めると言われています。しかし、ワケを明示したワケあり商品の場合には、単なる値引きの場合とは「知覚品質」への影響が異なる可能性があります。そこで、私たちは、ワケを明示することが「価格知覚」から「知覚品質」へのシグナリング効果に及ぼす影響を描写した「ワケあり商品購買意図モデル」の構築と実証を試みました。このモデルは、価格－品質の連想関係を描写した既存の価格効果モデルに、ワケあり商品の特徴である「値引き率」と「ワケ明示」という新たな概念を加え、さらに、「知覚品質」を「規格内品質属性」と「規格外品質属性」に分割したモデルであります。多母集団同時分析を伴った共分散構造分析を行った結果、ワケを明示することによって、「規格内品質属性」は、「知覚価値」に正の影響を及ぼす一方、「規格外品質属性」は、「知覚価値」に影響を及ぼしていないことが見出されました。既存研究者が、価格以外の外在的手がかりはシグナリング効果を緩衝すると主張していたのに対して、私たちは、外在的手がかりはシグナリング効果を緩衝することに留まらず、「知覚品質」は「知覚価値」に及ぼす影響を緩衝する効果があるという示唆を得ることができました。



10月、3ゼミ合同中間発表にて

◆執筆後記（第11期生 久米 敬太郎）

商学会賞を目指そうと決めてから受賞までの道程はとても困難なものでした。諦めようと考えたことも何度あったことか…まあ自分1人だけで論文を執筆していたら完全に諦めていましたね(笑)。商学会賞提出締切当日のギリギリまで修正し続け、何とか論文を提出することができたのも、昼夜問わず添削して下さった先生を始め、何度も文章の校正を引き受けて下さった大学院生や先輩方、そして、共に励まし合ったインゼミメンバーの存在のお蔭です。結果、受賞できて本当嬉しかった！！論文代表として、インゼミで活動してからは、過密スケジュールに弱気になったり、周りを引っ張っていかうとして、空回りしてしまったりして、自分が代表として向いていないのだろうかと本気で悩んだ時期もあったけど、多くの人の支えによって、最終的に商学会賞という形で大役を果たすことができました。本当にありがとうございます！インゼミで良かったな、小野ゼミでよかったなって心から思います！！

◆執筆後記（第11期生 石塚 佑飛）

受賞して嬉しいというより、ホッとしたという表現が、我々にはぴったりだろう。なぜなら、商学会賞提出までに、昼夜問わず最後まで面倒を見てくださった小野晃典先生をはじめに、何度も添削して下さった10期の先輩方や、論文の方向性や分析方法まで貴重な意見をくださった大学院生の方々など多くの人に支えられてきたからだ。それに、我々も7月から11月の提出までの4か月間は、論文尽くしの日々を送っていたし、最後の怒涛の追い込みもあった。内藤家の時計が11時半になっても論文の修正していた日のことが、昨日のこのように思い出されるほど、最後の怒涛の追い込みはそれだけインパクトが大きかったもので、受賞して報われたところは少なからずあった。今後、卒論といった高い山がそびえ立っているが、今回の受賞に向けて全力を尽くした経験を糧に邁進していきたい。

◆執筆後記（第11期生 小平 絃子）

論文執筆が開始してすぐは、雰囲気悪かったような、そもそも個人ワーク多かったような、ばらばらだった印象が強かったようなインゼミ。しかし、商学会賞を目指し始めたあたりから、目標が明確に定まったおかげか、皆で一緒に頑張る！ような雰囲気が徐々に始まったと思う。最終的にインゼミはすごく仲良く…！とまではいかないけど、ほどほどに仲良くなったし、居心地も良いな一と思えるまでになった。

インゼミは目標まで走るペースが遅かったり、文章が壊滅的だったりダメな所が多く、先生をはじめ多くの方々から沢山指導していただいた。小野ゼミにいなければ、商学会賞を受賞できなかっただろう。本当に、私は環境に恵まれていたなと思う。

一方で、インゼミの良い所は、商学会賞を出しに行く時、代表だけでもかまわないはずなのに、ちゃんと全員揃って提出しに行くほど、みんなで論文を書いている意識が強かった所だ。これまでいろんなチームでグループワークしたけど、こんなにも「全員で取り組む」チームは、今まで出会ったことがない。インゼミの良さを再確認するとともに、もうこのチームで論文を書くことがないと思うと、少し寂しく感じる。

◆執筆後記（第11期生 佐藤 和也）

「商学会賞を受賞すれば、大学で頑張った証になるし、就活で書けるだろうから欲しいな。」入会前、小野ゼミのホームページを見てそんな風に思っていた私は、1年後、目標を達成したのであった。言わずもがな、達成するには困難の連続であった。私以外の論文メンバーは、繊細な方々ばかりで、雰囲気もピリピリしていた時期もあった。けれども、無我夢中で走ったインゼミでの生活を思い返すと、懐かしく笑い話になることばかりがたくさんあるように思える。そのたびに、本当に充実していたな、自分の人生の励みになるといった、いろんな思いが頭の中で堂々巡りしている。

そして今、某保険会社のESついでに、この受賞感想を書いているのだが、設問の中に「学生時代頑張った概要について教えてください」とある。むろん、私が導き出した回答はこうだ。「エグゼミと称されるゼミを介して、学内最優秀賞の商学会賞を受賞した」と。1年前に思い描いていた未来を実現できる場、それが小野ゼミである。これからも過去に受賞された先輩達の名に恥じぬよう、ぐんぐん成長していきたい。

◆執筆後記（第11期生 山田 彩華）

「貴稿は採択となりましたので、締切日までに完成原稿を提出してください。」終わりはあっけないものだな、というのが受賞の瞬間の感想だった。他のメンバーもそのような感想だったのだろうか。喜びよりは、ラッキーという感情の方が強かった。1次締切が11月4日であったにもかかわらず、インゼミチームが商学会賞を志したのは、10月の後半だった。3ゼミ合同中間発表という大役を終えて、チーム内に漂うだらけムードを打破するために、急遽商学会賞を目標にしたのだった。当時の論文は、あまりに酷く、先生からは1次締切に間に合わせることは絶望的である、という厳しい現実を突きつけられた。しかし、頭の悪いインゼミチームは諦めなかった。10期生・大学院生に論文大工事をして頂き、先生に徹夜を何度も強いて奇跡的に締切に間に合わせたのだった。だから、今回の受賞は先生と上級生の熱意、それと諦めなかったインゼミチームの根性が引き起こしたミラクルラッキーだったのだと思う。今一度、先生と上級生に深謝したいと思う。本当にありがとうございました。



インゼミ本番発表前、リポDを飲んで気合を入れる第11期インゼミメンバー